



各事業所やフロアーに掲示

永 寿 会

虹の通信 第38号

2023年8月14日

～一人の人間には2回の死が有る～

法人内では各事業への入職者について、必ず法人理念や歴史、就業上大事にして欲しい事項や約束等を学ぶ研修の場が用意されており、就業時間内で参加して理解して貰います。この研修カリキュラムで理事長として述べる中に介護を職業とする中で、大事な哲学的概念の一つとして、「人には2回の死が有ること」を項目の一つにしています。

最近、ネット上で在宅薬剤師「やまね」の訪問日記に近代俳優の言葉として2回の死は「肉体が滅びた時と皆に忘れ去られた時」と紹介されていました。俳優は1989年に逝去した松田優作氏とされています。しかし、作詞家でエッセイストの永六輔さんが呟いた言葉とも言われており、真偽の定かは解りませんが、人の一生からすると深い意味が込められています。私も研修で資料に載せていますが、哲学書を読んでいる中でふと気付いたフレーズで書き込みました。そのため二人の講演記録等から頂いたものではありませんが不思議な気持ちを持っています。

今、介護施設の現場では全体的に要介護度が重くなり、医療施設では看取り行なうのではなく、介護施設特に特別養護老人ホームで最期の生活支援を行ない、看取りで人生の最期を迎えるようになってきました。そして社会環境的にも人を支える重要な社会的施設となりました

今年も8月旧盆の時期となり、私の家でもお墓参りをし、迎え火を焚き、亡くなった家族や先祖の位牌を安置して、盆棚を飾りお迎えをしました。まだ2回目の死を迎えていない6名の家族だった位牌も含めてですが、6人の輪郭はまだ確りと生存する家族の脳裏に生きています。こうした個人的経験を含めて介護施設で職務に従事する関係職員の心象に思いを馳せると重要で深い人間の意味を感じざるを得ません。

宗教学の分野を起点とする「グリーフケア」という言葉がありますが、介護福祉の分野ではその具体的展開となる「死別の悲しみを抱える遺族をサポートすること」に対しても理解を深めることが大事です。しかし、従事職員の皆さんにとっては利用者との別れが重なったとき自分自身が疲れ果てないように、御利用者の死は「三人称の死＝他人の死」であると冷静に見つめるケアのプロとしての視座を持って貰い、家族と同化するだけでなく自分の立場も忘れないようにして成長して行って下さい。人間は「生老病死」の宿命から逃れられず、個別的には「愛別離苦」と言う愛する人の死と遭遇します。そのためには先述のフレーズの河を泳ぐ必要があります。

以 上